東密と台密の相互影響から見た受容と研鑽の展開——事相・教相両側面からの討究——

鍵和田聖子

課程博士学位申請論文の要旨を述べるに先立って目次を挙げる。

序　論
第一章　東密の形成～空海の図像制作を中心に～（平安時代初期）
第一節　空海の曼荼羅思想
第一項　密教における図像の位置づけ
第二項　空海の四種曼荼羅思想
一　四種曼荼羅思想の内容
二　四種曼荼羅思想による経典解釈
a『大日経開題』　b、『金剛頂経開題』　c、『法華経開題』
三　『十住心論』『秘蔵宝鑰』の帰敬序に表れた四種曼荼羅思想
第二節　空海請来による請来美術と密教図像の製作
第一項　空海が請来した美術
第二項　空海が製作に関わった図像
a、千手観音曼荼羅　b、請来図像の転写と新たな図像の製作　c、金剛薩埵十七尊曼荼羅　d、四大明王の彫像と四摂・八供養・八方天の絵像　e、金剛峯寺金堂の諸尊　f、東寺講堂の立体曼荼羅
第三節　複数の経典によって構成された東寺講堂立体曼荼羅の展開
第一項　東寺講堂立体曼荼羅についての解釈をめぐる議論
第二項　空海における三輪身についての再検討
第三項　空海思想に見える尊格の位置づけ
第二章　台密の形成と東密からの影響（平安時代前期）
第一節　台密の形成
第二節　初期の天台密教と空海密教との関係性
一　最澄と空海
二　空海に対する円仁と円珍の態度
三　安然による空海の捉え方
第三節　東・台両密の橋渡しとなった人物達
一　東密宗叡・玄静と台密安然
二　東密淳祐・元杲と台密良源の交流及び小野流祖仁海
三　台密皇慶と高野山金剛三昧院本『四十帖決』
第三章　台密の独自的展開（平安時代前・中期）
第一節　台密で独自に発展した事相
第一項　阿字観本尊に関する台密の言及
一　台密における阿字観の評価
二　台密の文献に残された阿字観本尊に関する記述
三　台密文献に見られる九重阿字観

第二項　台密の宝冠阿弥陀如来と阿弥陀法
一　常行三昧堂の本尊
二　台密の阿弥陀法における曼荼羅上の大日・阿弥陀の本尊位の交替
第三項　台密における仁王経系曼荼羅様と文殊菩薩の鉤印
一　台密における仁王経曼荼羅様
二　台密における文殊菩薩の鉤印
第二節　台密独自の思想的展開
第一項　台密文献に見られる両部即一の思想
一　両部而二不二に関する議論
二　安然の円密一致論における法華経と密教の関係とその他台密文献に見られる金胎両部の思想
第二項　台密安然の『瑜祇経』解釈
一　空海の著述における『瑜祇経』の取り扱い
二　安然による『瑜祇経』の解釈
第四章　東密による台密の受容と展開（平安時代後期～鎌倉時代）
第一節　東密で用いられた図像に見られる台密の影響
第一項　東密の阿字観本尊成立に見られる台密の影響
一　東密の阿字観と阿字観本尊に関わる文献
二　東密文献に見られる九重阿字観
第二項　東密の紅頗梨色阿弥陀如来像の成立と台密の阿弥陀法の関わり
一　紅頗梨色阿弥陀如来像の思想的背景と成立時期
二　常行三昧堂本尊と紅頗梨色阿弥陀如来の図像的比較
三　曼荼羅上における大日・阿弥陀の本尊位の交替
第三項　東密の仁王経曼荼羅製作の意図とその分類
～仁海本仁王経曼荼羅の成立に見られる台密の影響を中心に～
一　仁海本曼荼羅考案の背景
a、五大明王を中心とする仁王経曼荼羅　b、仁海本における東上配置の背景　c、仁海が金剛利菩薩を鉤形に表した背景
二　定海本曼荼羅考案の背景
三　後世の人師による仁海本への言及
第二節　東密で成立した両部而二不二思想における台密の影響
第一項　東密済暹の両部即一思想と台密の言説
一　空海・覚鑁の両部思想概観
二　円珍の両部即一と済暹の引用
第二項　東密の『瑜祇経』解釈の変遷における台密安然の影響
第五章　台密による東密の再受容～東密で成立した両頭愛染の動向を中心に～（鎌倉～南北朝時代）
第一節　東密・台密における『瑜祇経』所説の尊格理解
一　東密における愛染明王の理解
二　東密と台密の仏眼仏母に関する尊格理解の差異
第二節　鎌倉時代以降の東密における愛染明王の一展開～両頭愛染曼荼羅図を中心に～
第一項　宗教思想史研究における両頭愛染についての評価
第二項　慈悲形と忿怒形の両頭愛染
第三項　愛染・不動二明王の組み合わせと金胎両部
第三節　両頭愛染に関する次第類の分析
第一項　金沢文庫蔵書に見られる両頭愛染に関する次第類
a、『一身両頭六臂愛染王』　b、『両頭八臂愛染法王記』　c、『両頭八臂愛染王記』　d、『渇秘』「造人形杵事」　e、『隆鏡抄』
第二項　高野山持明院蔵両頭愛染曼荼羅図と両頭愛染法
第四節　台密による東密の愛染法に対する批判と受容
結論

序　論

序論では、現在の密教研究における問題点を提起し、筆者の研究方法の特徴を明らかにした。なお、東密と台密の両語が最初に用いられたのは『元亨釈書』[1]で、鎌倉時代後期頃のである。すなわち、平安時代にはこういった区別は存在しないと考えられるが、本論では論旨を明確にする目的で、真言宗の密教に東密、天台宗の密教に台密という用語を用いた。現在の日本密教研究においては、東密・台密を分類しそれぞれを縦軸で捉えるのが一般的で、研究内容も教相分野と事相分野ないし図像学に大別される。現在、優れた日本密教史研究が多数提出されているが、これらは基本的に東密か台密のどちらかに立脚し、教相分野の範疇で教学史を述べるのが基本である。しかし筆者は、このような分類が定着することで、解釈の幅を狭め、誤った認識を生む事例も多いと考える。そこで本学位申請論文では、分類を踏まえながらも、教相・図像・事相という多角的な視点から日本密教を捉え直し、事相と教相の密接な関わり合いを主題としつつ、東密・台密が盛んに交流、影響し合いながら発展してきた様子を明らかにすることで、より立体的に日本密教を把握する方法論を提案したい。

第一章　東密の形成～空海の図像制作を中心に～

（平安時代初期）

第一章では、東密を形成した空海（七七四～八三五）による図像制作について論ずることで、日本における純粋密教の始まりを思想的、図像的という両方の観点から考察した。

まず、思想面では「四種曼荼羅思想」を取り上げ、実際に図画として描かれる曼荼羅が思想体系の中で重要事項として評価されている用例を示し、空海における密教美術の位置づけを明らかにした。その上で空海が請来、製作した密教図像について分析し、その中でも多く議論されながら、背景となる思想が明らかでない東寺講堂の立体曼荼羅（図1参照）を取り上げ、思想的背景を考察した。

図1　東寺講堂の立体曼荼羅の配置図（平安時代の配置）

多聞天　帝釈天　持国天

金剛業　金剛薩　　菩薩群
金剛波羅蜜
金剛法　金剛宝

不空成就　阿閦　　如来群
大　日
阿弥陀　宝生

金剛夜叉　降三世
不動　　明王群
大威徳　軍荼利

広目天　梵天　増長天

まず、本立体曼荼羅を四種曼荼羅思想における羯磨曼荼羅（立体的な造像で構成する曼荼羅）に比定した。その上で、先行研究において本曼荼羅配置の思想的背景と位置づけられている三輪身思想（菩薩・明王を如来の化身とする理論）や仁王経法、金剛界法などを、空海が確実に目にしていたことが確認できる空海撰『御請来目録』掲載の書物と空海自身の著作によって検討した。結果、仏・菩薩・明王の配置の典拠と目されてた三輪身思想が、空海には見られないことを指摘し、それに変わる典拠として『金剛頂経』系経典に広く説かれる金剛界三十七尊や『大日経』系経典に見られる明王を如来の使者とする説が考えられると結論付けた。

さらに、これまで十分に考察が進んでいなかった梵天と帝釈天については空海が重要視した護国経典である『守護国界陀羅尼経』（以下『守護経』）に説かれる金剛城曼荼羅で説明できることを指摘し、しかも明王群を除けば、立体曼荼羅と共通する尊格が多く配置されることから、『守護経』が曼荼羅作成に参照された可能性が高いことを指摘した。

すなわち本立体曼荼羅は、密教の根本経典である『金剛頂経』『大日経』の両部と国家鎮護を説く護国経典の思想に基盤を置き、それぞれの尊格群に関係性を見い出して構成された曼荼羅と考えることができる。

第二章　台密の形成と東密からの影響（平安時代前期）

第二章では、円仁（七九四～八六四）・円珍（八一四～八九一）・安然（八四一～？）といった平安時代前期に活躍した天台密教の思想家を中心に台密の形成と、形成時における空海からの影響を探り、さらに東密と台密の交流の軌跡を歴史資料から裏付けた。

まず、彼らの教学の各特徴を提示する上で、「顕教ないし天台円教と密教の関係性をどう捉えていたか」という点を例に取り、各師の教説について言及した。その上で、特に円仁と安然には密教を優位とする「円劣密勝」的な表現が見られ、台密の大成者に位置づけられる安然が、円仁の思想を一歩深めていることを示した。

さらに、天台宗祖最澄（七六七～八二二）が空海に弟子入りする形で密教を教受するといった交流や、円珍や安然における空海密教の影響を考察した。これにより、特に安然は、空海を一先学として捉えていたことを明らかにし、平安時代前期の台密の思想家が空海の影響を多分に受けていたことを示した。

また、歴史資料に残された東密・台密の枠を超えた師資関係や、両宗を行き来していた人物、書物などに着目し、東・台両宗に盛ん

な交流があったことを裏付ける事例を紹介した。これらの事例は教学や事相における影響関係の重要な傍証と見ることができる。

第三章　台密の独自的展開（平安時代前・中期）

第三章では事相ないし図像と思想について、平安時代中期頃までを中心に、空海には見られなかった台密の独自的展開を論じた。本章では特に後に東密に影響を与えたと考えられる事例を紹介することで、四章での展開を導き出すことを目的とした。

平安時代前期頃の日本密教においては、台密の円仁・円珍・安然らが大いに活躍し、台密の立場を確立した一方、東密では空海の教学の伝承に重きが置かれたため、躍進的な教学展開が見出せない。そのような中、台密では、事・教両相に渡って空海に見られない独自の展開が見出せる。

まず、事相面から「阿字観本尊に関する台密の言及」「常行三昧堂（以下・常行堂）本尊と台密独自の阿弥陀法」「台密の仁王経曼荼羅様」という三例を挙げて論じた。阿字観本尊とは特に東密で発展したと考えられてきた阿字観に使用する本尊で、胎蔵と金剛界の二種がある。東密で完成形の阿字観本尊が説かれるのは平安時代後期頃の事であるが、先行して平安前期に円珍や安然によって執筆された台密文献に阿字観への言及が見られ、具体的な本尊が説かれる。特に安然においては、胎蔵・金剛界本尊の区別も明確で、絵像の本尊を使用した記録も確認することができ、阿字観本尊は元々台密で独自に成立・発展したと考えられることを指摘した。

また、日本の常行堂は円仁によって比叡山東塔に建立されたのが始まりであり、その本尊は宝冠を頂いた阿弥陀如来であった。このような宝冠阿弥陀如来は円仁請来の「金剛界八十一尊曼荼羅」にも見られる。なお、空海請来の現図曼荼羅には描かれず、宝冠阿弥陀如来は台密で独自に用いられていたと言える。また台密の阿弥陀法に、通常、大日如来を中尊とする曼荼羅で西方に配すべき阿弥陀如来を中尊とし、西方に大日如来を移動させる曼荼羅を用いる方法がある。これは、台密を中心に用いられた『大日経義釈』[2]に説かれる曼荼羅であり、安然、覚超（九六〇～一〇三四）、皇慶（九七七～一〇四九）といった台密人師の文献に説かれ、これも当初は台密独自の阿弥陀法曼荼羅であったと考えられる。

思想面では、密教の基本である金剛界・胎蔵の両部について台密における展開を考察した。なお、東密では金剛界・胎蔵の両部は「両部而二不二」とされ、台密では金剛界・胎蔵両部の外に蘇悉地を立て、両部を二而門、蘇悉地を不二門とする。

さて、台密では天台宗の根本経典、『法華経』の密教的解釈が進んだ。中でも『入真言門入如実見講演法華略儀』（以下『講演法華儀』[3]）は天台教義と密教教義の一致を説く代表的文献で、円珍仮託ではあるが、台密思想史上に位置づけられる資料であり、しかも、明確に「両部即一」の思想が説かれる。これは、東密で両部不二思想が確立する以前の記述と考えられ、台密の独自的展開と言える。

同じような傾向は東密の入唐僧によって請来された金剛頂経系経典である『瑜祇経』の台密安然による解釈にも見られ、空海の著述で『瑜祇経』は金剛頂経系の経典とされるが、安然は本経に胎蔵の要素を見出し、『瑜祇経』を両部に亘る経典と判じ、「金剛界の蘇悉地」に位置づける独自の解釈が見られることを指摘できる。④

第四章　東密による台密の受容と展開（平安時代後期～鎌倉時代）

第四章では、三章に論じた台密独自の展開が東密にどのように影響したのかを考察した。結果、平安後期以降の東密には事相・教相の両側面に亘って、安然を始め台密の影響が甚大であり、さらに東密的な解釈をほどこし、展開したことを指摘した。

事相面では、最初に東密の阿字観本尊成立に見られる台密の影響を見た。安然には金剛界本尊と胎蔵本尊の区別が見られたが、東密においてこのような区別が確立されるのは、鎌倉時代の頼瑜（一二二六～一三〇四）撰『阿字秘釈』⑤で、本書には安然の釈が度々引かれることから、頼瑜が安然を参照して阿字観の理論を立てたことを示した。同時に、その他の要素も合わせて考えると東密の阿字観には、全体に台密の解釈が影響した可能性が高い。

また、三章に論じた台密の宝冠阿弥陀如来と東密の紅頗梨色阿弥陀如来像（宝冠阿弥陀形をとる）の関係に論及した。紅頗梨色阿弥陀如来像は真言密教において、平安後期に覚鑁（一〇九五～一一四三）などを中心に打ち立てられた「大日即弥陀」という理論の下、東密において成立したとされている。ところが、本阿弥陀如来が説かれ、空海撰と伝わる『無量寿如来次第御作』と『無量寿如来供養作法次第』⑥は偽撰で12世紀～13世紀頃の成立と考えられ、宝冠阿弥陀としては天台の常行堂本尊が遙かに先行する。また、承澄（一二〇五～一二八二）撰『阿沙縛抄』⑦に、東寺の恵什（一〇六〇～?）・心覚（一一一七～一一八一頃）が宝冠阿弥陀は無いと言っていたことが記録されており、東密では12世紀頃まで、宝冠阿弥陀が流布していなかったと考えられる。なお、12世紀頃の台密口決集である静然撰『行林抄』には平安中期の皇慶作『池上私記』⑧が所収されており、紅頗梨色阿弥陀如来についての記述が見られることから、12世紀以降に台密の道場観が東密に伝わり、伝空海の次第として成立したと考えられる。また、台密の阿弥陀如来を中尊とし、大日如来を西方に配置する曼荼羅は、その後、東密でも見られるようになるが、覚鑁などはこれを「大日弥陀一仏の義」によるとし、台密には見られなかった「大日如来と阿弥陀如来の同体」による説明が付け加えられている。

さらに、東密の仁海によって考案されたと考えられてきた五大明王を中心に配置する仁王経曼荼羅についても、仁海以前に台密の安然がほぼ同様の構造を持った曼荼羅に言及しており、台密の影響があった可能性は高い。

次に教相面では、東密の両部不二思想に見られる台密の影響につ

いて考察した。まず、両部不二思想の形成者を平安後期に活躍した覚鑁とする、従来、有力とされてきた説に対し、その先行思想が覚鑁以前に済暹によってほぼ完成していることを指摘した。しかも、済暹（一〇二五～一一一五）は台密文献の『講演法華儀』を円珍の撰述と見た上で証左にして論を立てていることを示した。また、東密の『瑜祇経』解釈の変遷について、『瑜祇経』は空海によって『金剛頂経』系の経典とみなされたが、平安後期から鎌倉前期頃の東密における『瑜祇経』関係の注釈書を確認すると、両部不二の経典と判じており、安然の説がたびたび引かれ、台密の論説が参照されていた様子がわかる。すなわち、東密において『瑜祇経』は「『金剛頂経』系の経典」から「両部不二の経典」とへと変遷し、その一つの切っ掛けに安然の『瑜祇経』解釈を挙げることができるのである。

以上より、従来東密において発展したと考えられてきた事相の何例かは、先行して台密で行われていたことが判明した。また、東密の根幹的思想とさえ捉えられてきた両部不二思想は、台密の影響の上に確立したものであることを指摘することができた。

第五章　台密による東密の再受容（鎌倉～南北朝時代）
～東密で成立した両頭愛染の動向を中心に～

第五章では、東密で成立した両頭愛染の動向を中心に論じた。両頭愛染曼陀羅図は愛染明王と不動明王を合体させたような明王を中尊とする特異な曼荼羅であり、研究が進んでおらず、この度、その成立や発展の経緯と思想的背景を、新出の次第資料を中心として論じ、両頭愛染を仏教的な視点から捉える研究を行った。その上で、両頭愛染や両頭愛染にまつわる事相が台密によって受容される様子を探ることで、平安期に台密から多大な影響を受けた東密が、再度、台密へ影響を与えた事例の一端を示した。

さて、『瑜祇経』所説の尊格については、東密では愛染明王、台密の山門（比叡山）では仏眼仏母が修法の対象になった。特に、東密の愛染明王の尊格理解は『瑜祇経』が両部不二の経典と解釈されるのと同時期に、盛んに両部不二の尊格と解釈されるようになり、経典解釈と尊格理解が密接に関係していた様子が窺える。さらに、愛染明王の異形である両頭愛染について残された次第類を分析すると、醍醐寺周辺で成立し、あらゆる修法に用いられた記録が見られ、両部不二の尊格として性格づけられる部分が大きいことがわかった。

さらに、両頭愛染に対する言及は後に台密でも見られるようになる。これら台密の言及を確認すると、12～13世紀頃には両頭愛染を異端的なものと見て否定的であるが、13世紀後半から14世紀頃になると、両頭愛染を円珍に仮託するなど、徐々に台密における正当性が主張されるようになる。なお、三・四章で論じた東密と台密の交流は、日常的に行じる阿字観や、鎮護国家の大法要であった仁王経法の曼荼羅などに見られたが、中世には両頭愛染という「最極深

秘」とされた法までもが流入していることは、中世密教の一特徴と捉えられる。

結　論

以上により、日本密教においては東密と台密が密接に交流しながら、それぞれの立場に立脚して密教を形成、発展させてきたことを指摘することができる。また、事相や図像と教相は切り離せるものではなく、図像は修法や観想法の本尊観の図像化で、多分に思想的背景が隠れている。すなわち、日本の密教を考える場合、東密・台密・事相・教相というような細かい分類に捕らわれず、日本密教という大きな流れとして捉えるべきであることを主張したい。

なお、本論によって生じた今後の課題としては、東密の三輪身思想形成に東寺の立体曼荼羅が影響した可能性があるのではないかという問題や、両頭愛染曼荼羅における特殊な像容の二童子の意味などが挙げられる。また、両部而二不二思想は、室町期頃まで展開が見られるが、この度は考察が及ばなかった。さらに、著作の真偽が明確でない例や、推測の域に留まった部分も残っている。今後も、これらの問題の探求に努めて行きたい。

註

① 『日本仏教全書』（以下『日仏全』）一〇一・四六六頁・下参照。
② 『卍続蔵』二三・四六四頁・上参照。
③ 『大正蔵』五六・一九二頁・中～下参照。
④ 『金剛峰楼閣一切瑜祇経修行法』（『大正蔵』六一・四八五頁・上～中）、『金剛界対受記』（『大正蔵』七五・一八八頁・下）、『真言宗教時義』（『大正蔵』七五・四四〇頁・下～四四一頁・上）等参照。
⑤ 承応二年・七郎右衛門華開板本参照。
⑥ 『弘法大師全集』第二輯・五百十一頁～五百十二頁参照。
⑦ 『日仏全』三六・八〇七頁参照。
⑧ 『大正蔵』七六・三三・三四頁・中参照。